

# 男看の時代～

## 交流編- スポーツ、旅行…採用にも一役

近年、男性看護師の数は増え続けているが、医療機関では依然として、女性が圧倒的多数を占めるのが現状だ。所属する病棟などで男女比に差もあり、就職前に漠然とした不安を抱える男性の新卒者も少なくない。こうした中、“男看”たちは職場で交流会を開き、積極的に親睦を深めている。スポーツで汗を流したり、酒を酌み交わしたり…。時には仕事の悩みも語り合う。こうした取り組みは、人間関係を円滑にするだけでなく、男性の新規採用にも一役買っている。【敦賀陽平】

8月上旬、東京都板橋区のフットサルコート。平日の午後7時すぎ、仕事を終えた職員たちが続々と集まってきた。同区内にある豊島病院のフットサル部のメンバーだ。チーム名は「FC. Toshima」。男女総勢28人のメンバーは、医師や看護師をはじめ、薬剤師、放射線技師、事務職員らが名を連ねる。

「とにかく病院を盛り上げたいんです。多職種が交流することで、現場でもっと楽しく働ける。その思いが後輩に伝わって、男性看護師全体の活気につながればうれしいですね」。

9年前、この部を立ち上げた手術室の主任看護師、岡瀬邦昭さん（36）はこう話す。

現在、豊島病院の常勤看護師は331人。このうち男性は18人と、全体の1割に満たないが、フットサル部には5人が在籍している。「新人の男性看護師が入ると、必ず勧誘する」という岡瀬さんの地道な活動の成果だ。

手術室で働く高橋宏明さん（24）も、岡瀬さんに誘われて入部した一人。「以前は、仕事で緊張し過ぎることもありましたが、外科の先生と接する機会も増え、今ではいい緊張感を持ってやっています」と、高橋さんは充実感をにじませる。

岡瀬さんと共に、創設時から参加している外科医の阿美克典さん（44）も、「電話でしか話したことのない人たちと顔見知りになり、冗談を言い合えるようになると、仕事にもいい影響が出ます」と、多職種による交流の意義を実感している。



練習試合で汗を流す豊島病院フットサル部のメンバー

出典：医療介護 CB ニュース キャリアブレイン